

Late-Onset Circulatory Collapse and Risk of Cerebral Palsy in Extremely Preterm Infants

安岡, 和昭

<https://hdl.handle.net/2324/4784487>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名： 安岡 和昭

論文名： Late-Onset Circulatory Collapse and Risk of Cerebral Palsy in Extremely Preterm Infants

(超早産児における晩期循環不全と脳性麻痺のリスク)

区 分： 甲

論 文 内 容 の 要 旨

晩期循環不全（LCC）は早産児に特有の循環障害で、生後数日経過し、呼吸循環が落ち着いた後に突然血圧、尿量が低下する疾患である。本解析の目的は、在胎22週から在胎27週に出生した超早産児を対象として、LCC発症が3歳時脳性麻痺と関連するかを調べることである。

方法は、2008年から2012年に出生し、日本新生児臨床研究ネットワークデータベースに登録された、LCCの有無が明らかな超早産児7613名を潜在的な解析対象児とした。潜在的な解析対照児の中で、3歳時フォローアップ未受診の3909名及び、フォローアップデータが欠損していた230名を除外解析対象児3474名（潜在的な対照児の45.6%）が決定された。解析対象児は月齢36-42に神経学的予後が評価された。LCCは臨床症状により診断された児の中で、治療にステロイドを要した児と定義された。解析対象児の中で、LCC群と非LCC群で3歳時神経学的予後を比較した。

解析対象児中666/3474名（19.2%）の児がLCCを発症した。LCC群は非LCC群と比べ3歳時脳性麻痺の頻度が高かった（18.0%対9.8%； $P < 0.01$ ）。また、多変量ロジスティック回帰分析では、LCCは脳性麻痺（調整オッズ比1.52；95%信頼区間1.13-2.04）、DQ < 50（調整オッズ比 1.83；95%信頼区間1.23-2.72）と有意に独立して関連した。

結論として、超早産児のLCCが稀な疾患ではない可能性があること及び、LCCが3歳時脳性麻痺の独立した危険因子となることを明らかにした。